



西総合支援学校 構造化・PECSによる 学習の紹介2019



本校では毎年、フリーランスの児童精神科医 門真一郎先生に定期的にご来校いただき、構造化された指導やPECSによるコミュニケーション指導についてコンサルテーションをしていただいています。一昨年度、門先生より、「PECSにまつわるエピソードをホームページで紹介してみませんか」とご助言をいただき、担任・担当の先生方から指導の様子や子どもの様子を再度確認し、ホームページで紹介することにしました。

改めて強く感じるのは、PECSなどのコミュニケーション指導を通して、単に子ども達が自分の思い等を伝えられるようになることだけでなく、行動や生活全般を大きく変容させるということでした。また、「カードを利用すると、せっかく出始めている言葉が出なくなってしまうのでは？」と心配される保護者の方もいらっしゃいますが、PECSによってコミュニケーションできるようになった子ども達は、さらにいろいろな方法・場面でより多くの人とコミュニケーションしようとするので、『今まで以上に、語彙が増え言葉が明瞭になる』という変容でした。

西総合支援学校 構造化・PECSによる学習の紹介2019



PECS（ベクス）とは、アンディ・ボンディ博士（応用行動分析）とロリ・フロスト（言語聴覚士）によって開発された「絵カード交換式コミュニケーション・システム（The Picture Exchange Communication System）」です。最初から自発的コミュニケーション・実用的コミュニケーション・スキルを教えることができ、対人接近が確実にできるようになる指導方法です。

※PECSでは、「人に向かって自分の要求を自分から伝える」ことをまずトレーニングします。

※PECSでは、6つのフェーズ（段階）が用意されています。

西総合支援学校 構造化・PECSによる学習の紹介2019

事例1：単語程度の発語はあるのですが、見えた興味あるものに対して突進していきます。思いが通らないと床に転がって叫びだすこともある児童の事例です。PECSによって、自分の思いを伝えられるようになりつつあり、落ち着いて行動できるようになってきています。

事例2：発語があり声かけて動けるのですが、自発的な要求が少なく、周囲の人をたたいたりつねったりするといった子どもの困りに対する取組事例です。PECSで自発的な要求行動を学習し、「せんせい」「いってきます」など、カードを使わなくても3語文を言えるようになりました。

事例3：車いすを利用している発語のない児童の事例です。好きなことや好きな人の声掛けで、よく声をあげて笑っています。自分から手が伸びるような大好きなこと・もの・ひと（強化子と呼ぶ）を見つけ、自発的に要求が伝えられるように取り組んでいます。

事例4：単語を読んで理解することが可能であり、言語コミュニケーションがある程度できる児童の事例です。この児童の困りは、「耳からの情報だけで自分の取るべき行動を理解しすぐ動ける」と周囲に思われたことにあったようです。「言葉があるということ＝コミュニケーションが取れている」と周囲は思いがちです。「聞いた」ことはただ「きこえている」だけで、機能的なコミュニケーション（従ったり共感したり意見したり）にたどり着けていないこともあります。しかも、「いや」という拒否や、本当に必要な時に「○○ください」が言えていなかったりすることもあります。

西総合支援学校 構造化・PECSによる学習の紹介2019

事例5：物の名称理解度は高く、不明瞭ですが単語程度の発語がある子どもの事例です。高い場所やブランコが大好きでよく動き回っています。時々、突然の大泣きや激しい動きなどがあります。休憩時間のお楽しみプレートにブランコを提示すると文カードで要求することができるようになってきており、徐々に適切な場面と回数の要求に落ち着いてきています。

事例6：発語はなく、YESは首を縦に軽く振る、NOはあまり表現していない高等部の生徒の事例です。排便要求で激しく泣くことがあります。プール学習に参加できませんでした。

プール学習では、「今日はここまで入る」を視覚的に伝え、約束を守ってスモールステップで進めました。プールに入ったときの笑顔の写真を学習後に渡すなど行い、徐々に参加できるようになってきています。また、いろいろな活動場面で、事前のスケジュール提示等により、落ち着いてスムーズに活動できています。

西総合支援学校 コミュニケーション学習 表出と理解の取り組み

1. PECS
2. スケジュール
3. 視覚支援
4. 個別課題



*コミュニケーション学習の中心としているのがPECS（ペクス）です
ペクスとは・・・

【絵カード交換式コミュニケーション・システム】

西総合支援学校では、年間数回のスーパーバイズを受け、支援依頼があった子どもたちにペクス支援を実施しています。（ホームページを参照ください）

1. PECS（ペクス）とは



▶事例1（ご紹介する事例は個人が特定できないように、いくつかの事例をミックスしてあります）

- ▶小学部3年生 女兒 単語程度の発語はあるが、見えた興味あるものに対して突進していく。思いが通らないと床に転がって叫びだす。
- ▶⇒言いたいことがあるが、人に伝えるスキルを未修得
- ▶支援・・・*ペクスによる自発的要求のトレーニング（教室で朝学習時）
- ▶*カードによるスケジュール実施
- ▶*担任の言語指示を「みてわかる」指示に極力移行してもらう
- ▶【ペクスでは「人に向かって自分の要求を自分から伝える」ことをまずトレーニングします。】
- ▶経過 *床に転がっての訴えはほとんど見られなくなった。
- ▶*個別学習がすすみ、落ち着いて机で学習できるようになった。

事例を通してペクスの特徴をお伝えします。

*事例1では、フェーズ5まで進みました。

▶PECSでは6つのフェーズ（段階）が用意されています。

- 1...一枚のカードで手の届く相手にカードを手渡す
- 2...一枚のカードで手の届かない相手に移動して1枚カードを手渡す
- 3...二枚のカードから選んで相手に1枚手渡す（弁別）
- 4...「○○」「下さい」と2枚のカードを文バーに貼って相手に手渡す
- 5...相手に「何が欲しいの?」と聞かれて文バーを作り、手渡す（応答）
- 6...「飛行機が見えるね」など、相手に自分から伝える（コメント）



事例1とPECS

▶事例 2

▶ 小学部4年生 男子

「せんせい」「トイレ」等の発語あり

声かけで動けるが、自発的な要求が少ない

突然周囲の人をたたく、つねる等の行動あり

* 支援⇒・個別に別教室でPECSトレーニング実施
・言語指示だけでなく視覚的に伝えてみる

事例 2 視覚支援とPECS

- ▶「つねる」「たたく」「かむ」などの行動は、適切な行動を学習できていないため、がほとんど。
- ▶彼らは「人の振り見て我が振り直す」のは苦手。
- ▶「あなたもされたら痛いでしょう？」は理解が困難。
- ▶そんな彼らに、分かりやすく理解できる方法で伝えましょう。
- ▶視覚的に！具体的に！
- ▶適切なルールを！



事例 2 における支援の方向性

- ▶周囲にとっての困った行動（たたく・つねる等）は
「困っています。どうしたらいいか教えて！」
と、本人が訴えていると理解する。

⇒「困っている」ことは何か

→解決方法を探る

*「要求がかなえられない」

「言いたいことを伝えられない」場合がほとんど。

→自分でできる解決方法を学習する

*PECSで自発的な要求行動を学習。（一日50～60回以上）

【学習することで自尊心・自己肯定感をはぐくんでいける】はずです。



PECSによる自発的要求のトレーニング

▶事例 2 PECS フェーズ6まで順調に進む。

- ▶「せんせい」「トイレ」「いってきます」など、カードを使わなくても3語文をスツと言え、言語によるコミュニケーション力が伸びてきている。「行動修正」は体調や不安の程度により不安定ながらも少しずつ進みつつある。



*今後の課題・・・

- ▶「すき」or「嫌い」の適時な意思表示、適切に「待つ」、「手伝って・ください」を自発的に言うなどのスキル向上
- ▶生活の中で、自発的に要求やコメントをたくさん出せるような状況の設定
- ▶社会性の力を伸ばす（例えば友達と同じおもちゃを使って遊べるなど）

事例 2 現状と今後

▶事例3

小学部5年生 女子
発語なし、車いす使用

好きなことや好きな人の声掛けで、声をあげて笑う。

*誰も、本当に好きなモノ・人には自然に手が伸びる、喜ぶ

⇒ **自発的に要求する**

*PECSは、この人間の自然な行動を、心理学的に活用します。
つまり、自分から手が伸びるような大好きなこと・もの・ひと
(強化子と呼ぶ)を見つけること！！



事例3 PECSと強化子

▶事例3では、以前から受診時に主治医がトレーニングを実施されていたため、学校でも取り組み始めました。

状態として

*車いすの自走は困難、歩行練習継続中

*車いすから降りて四つ這いで移動できる

⇒ マットに下りてフェーズ2を実施可能。

*車いす使用者のPECSでは、◎興味があること・モノがあること◎
興味のあるものを自分から得ようとする行動が見られること を確認
します。事例の子どもは、人の声が大好きでした。



事例3 車いすとPECS

事例3の児童の特性

*集中時間が長くない、飽きる、疲れる

*別の音や人の声、ほかの人の気配で注意がそれる

⇒「強化子をいくつか用意し、飽きる前に取り替える」

「一回に3分ほどでもよいから、毎日取り組む」

のスーパーバイズを受け、担任中心に取り組みました。

*強化子は・iPadに入れた好きな先生・お母さんの動画、入れ
子カップ、音のなる絵本などでした。



事例3における支援の経過

▶ スケジュールの提示・・・

実物・写真・イラストカードなど、どんな種類にするか
どんなシステムにするか
どれだけ提示するか

*日々の観察により強化子を増やしていく

*フェーズ4 (文カードを作成し取って手渡す)

*フェーズ5 応答として文カードを出す



スケジュールをカードで提示し、PECSでもカードを使用することで相乗効果が、カード
を「見る」スキルが伸び、本人さんも迷いなくカードを手にしてくれやすくなります。

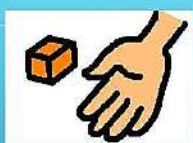
事例3 今後の課題

事例4

小学部3年生 男子

- ・言語コミュニケーションがある程度可能。単語を読み理解可能。
- ・周囲の人をたたく、押すなどの行為がある。
- ・不安が強い。「ちょうだい」や「いや！」等言うべき時に言えない。
- ・ipadを自在に利用できる。

*支援⇒個別にPECS1～6, PECS4+(ipad)
自尊心を育めるような対応。



事例4 言葉がある子どもとのコミュニケーション



- ▶ブックの準備, 強化子の選択とそのカードの準備
 - ▶個別に教室で担任と実施
 - ▶フェーズ1から初め, 30分の間にフェーズ4までクリア。不安そうだがエラーはほぼない。
 - ▶フェーズ5からPECS4+(iPad)トレーニング。一回にひとつずつクリア。
 - ①「○○(動物)」「見えます」や, 「○○先生」「声」「聞こえます」のコメント。ための 楽しそうな笑顔あり。
 - ②「白い」「大きな」「風船」「見えます」など2つ以上の属性を含むコメント。
 - ③「○○先生」「おなか痛い」「見えます」など映像による体調のコメント。
- 課題⇒個別の授業時にトレーニングしたことを, 生活の中で使う設定。
登校しにくくなり, 繰り返しのトレーニングが中断, 充実感を得られるまでに至らなかった。

事例4 PECSトレーニング経過と課題

2

▶コミュニケーションの定義

『別の人に向けられ, 次にその人から, 関連する直接的報酬または社会的報酬が提供される行動』 (『絵カードでコミュニケーションPECSとAAC』第2版より)

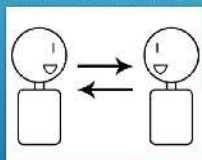
PECSでは

- * 人に向けられている行動であること (クレール行動は異なります)
- * 自発的行動であること (ほかの人の促しは一切ないこと)

を重要視します。また, 本人が

- * 理解すること
- * 発信すること

を車の両輪のように考えていきます。



コミュニケーションとは

3

- ▶言葉があるということ=コミュニケーションが取れていると周囲は思いがちです。
- ▶脳の偏った発達により引き起こされる「社会性コミュニケーションの困難さ」が彼らの生きづらさの中核です。
- ▶「聞いた」ことはただ「きこえている」だけで, 機能的なコミュニケーション(従ったり共感したり意見したり)にたどり着けていない。しかも「いや」という拒否や, 本当に必要な時に「○○ください」が言えていなかったのです。
- ▶「耳からの情報は一度映像化して理解するため時間がかかるし, 映像化できない言葉(cf. 幸せ・ちょっと等)は理解が難しい」とアメリカの動物学者で自閉症当事者のテンブル・グランディンさんは言っています。
- ▶事例4の児童の困りは「耳からの情報だけで自分の取るべき行動を理解しすぐ動ける」と周囲に思われたことかもしれません。「3語文程度の文章を聞いて」「理解し」「自分に指示されていることを理解し」「行動を決め」「動く」。定型発達では苦勞せずに身に付きやすいことも, 結構複雑な過程を経ています。
- ▶耳からの情報処理が偏って発達する彼らにとって, 言葉をコミュニケーションツールとしてスムーズに使うためには定型発達の人の何倍も労力を要することになります。
- ▶しかも, もし間違えて理解した時には「失敗」になり, 時を経てもし悲色に変わるところが原色化して毎回積み重なり自尊心を削っていきます。
- ▶そんな時, 視覚的な支援があると「聞いて理解する」労力を使わずして, 一瞬のうちに指示を理解できるので, 失敗も減り, 自尊心を削られず, 達成感や充実感が持て, 「できる存在だ」と自分自身が感じられるでしょう。



事例4 言葉があるということ ≠ コミュニケーションが可能

4

- ▶ 事例4の児童は事例2の児童以上に言語スキルは高く、周囲の人間は日常生活に困難を感じていませんでした。ところが人に手を出すという行動が学校でも家でも放課後デイでもみられ、周囲は困っていました。

- ▶ でも、問題となる行動のみに焦点を当ててしまうと、本人の困りが見えにくく、根本的解決につながりにくくなります。
- ▶ この児童の場合、もし「人に手を出すという行動をやめさせる指導」に舵を切っていたら、謝って一件落着…になり、繰り返されます。??

*本人たちは、「人のふり見て」学習は苦手です。

*そして「もし自分がされたいやだろう」のイメージはもちにくいです。

- ▶ 支援者は、本人は何に困ってその行動に至ったのか、そしてその行動をすることでどんな結果が起きているのかを客観的な観察・記録(評価)から考え、適切で社会的に許される行動への行動修正学習を計画します。一人でなく複数の人で考えると良いアイデアも出てきます。



事例4 行動の観察と評価と行動修正

5

- ▶ 行動だけを見て実施する支援は解決につながりにくい。
 - ▶ 言葉がたとえあっても、**視覚支援**は必需。言葉がある時こそ必要である。
 - ▶ 彼らは彼らなりの方法で指示に従おうとしている。超真面目に。
 - ▶ 彼らは学習したがっている。(学習意欲)
 - ▶ 彼らは学習する力が備わっている。(学習能力)
 - ▶ 支援者は彼らのそんな力を日々信じて支援にあたる。
 - ▶ 支援者は客観的視点を持ち、子どもの自尊感情を損なう態度や感情を自ら控えるよう努力する。
 - ▶ 【社会的視覚支援を見極め、自立して理解・発信できる】という力の育成を！
- (事例4の報告は文字が多くなりました。言葉のある子どもたちへの支援への一助になれば幸いです。)



事例4で考えられたこと

6

事例5

中学部 1年生 男子

発語は単語程度があるも不明瞭、物の名称理解度は高い。
高い場所、ブランコが大好きで動き回る。
周囲には理解できない突然の大泣き、激しい動きなどがある

支援⇒ 個別スケジュールの確立（理解の補助）
PECSを個別抽出でトレーニング（発信の育成）
視覚的支援を徹底する（理解の補助）



事例5 支援及びPECSの取り組み

1

トレーニング

- ▶ 抽出でフェーズ1からフェーズ6まで進める
- ▶ 強化子は「テープ」「シャボン玉」「風船」「ブランコ押し」など
- ▶ フェーズ6コメント「あかい」「風船」「みえます」「クリア

課題

- ▶ 「ねこ」「声」「聞こえます」などトレーニング。聴覚情報の処理は不確実
- ▶ 状況設定により、生活の中で何回でもコメントを出す取り組みの工夫

今後

フェーズ6:コメントへ進め、生活の中でカードコミュニケーションを多く使う



事例5 PECSトレーニングと課題

2

*スーパーバイズを受け、事例5の生徒に、カードでブランコ押し要求の設定をしました。

・一日でどれくらい要求するかを観察

・要求回数プラスアルファのカード数を準備

・カードでブランコ押しを要求してもらう

・交渉しながら少しずつ回数を減らしていく

・一日(もしくは一回)に要求可能な回数をカードの数で示し、以後はノーマークで示す



*結果

一日分の作成したカードを見た日から、要求回数が減る

休憩時間のお楽しみプレートにブランコを提示すると、文カードで要求する

徐々に適切な場面と回数の要求に落ち着いていった



事例5 PECSによる要求回数のコントロール

3

*学校では、毎年4月初めにその生徒を取り巻く環境が大幅に変化します。

場所（教室）が、担任が、クラスメートが変わります。

事前に伝えられない事柄も多くあり、担任側の工夫が欠かせません。
しかし特別教室、体育館や音楽室、保健室はほとんど変わりません。

*変化することを視覚的に伝えることが大切です。

事例5の生徒の場合・・・

変更を写真で示す 旧担任（ノーマークも有効）⇒新担任

・ワーク・ユニットなど担当する先生方も写真に名前を入れて提示

・各活動時間の主指導者を写真と名前で視覚的に明確にする

・新クラスメートを写真と名前で提示する

・学年全体とクラスを写真と名前で提示する 等

視覚支援で新年度の学校環境の変化を伝え、

不安や戸惑いを最小限に留めるように取り組みました。

（支援を実施すると変更があっても生活が落ち着き、実施しなかった場合は想像つきません）



学校における大きな課題と視覚支援・工夫

4

事例6

高等部1年生 男子

発語なし

YESは首を縦に軽く振る, NOはあまり表現していない

排便要求で激しく泣く

プール学習に参加できない

支援⇒PECSフェーズ6及び9つのスキルのトレーニング
プール学習における不安除去, 食後ブラッシングの手順書補助等
視覚支援のアイデアの提供



事例6

PECSと視覚支援を生活に活用する

1

▶ 中学部時より個別抽出でPECSトレーニングに取り組む。

▶ 好きなものをアセスメント・・・好きな音楽・好きな手触りおもちゃ等。

※教室で担任が学習時の色鉛筆や色マジックなどの要求状況設定

▶ フェーズ6では体調の発信トレーニング・・・PECS4+へ

▶ 9つのスキルでは首を縦横に振りYES,NOの返事のトレーニング。

⇒コミュニケーションとしてカードを活用する方法を理解し, 使えるようになってきている。



事例6 PECSのトレーニング経過

2

・プール学習

「今日はここまで入る」を視覚的に伝え, 約束を守ってスモールステップで進める。プールに入ったときの笑顔の写真を学習後に渡す。

⇒徐々に参加できるようになってきている。

・宿泊学習

⇒事前スケジュールの提示等により, 落ち着いてスムーズに活動できた。

・食後ブラッシング

自立した活動へ, ブラッシングのめくり式手順書提案。

⇒手順書をめくりながら一人でできるようになってきている。



事例6 視覚支援による学校生活・学習への支援 3

*PECS及び視覚支援によるコミュニケーション支援(発信と理解)が, 不安定になりがちな心理状態を補い, 日々を穏やかに過ごせる要因を提供していると考え。

*彼の人生はこれから。社会に巣立ってからでも視覚的情報を理解し, 彼なりの自立生活に結びつけられるよう, 支援をつなげ, 継続していく必要がある。

*視覚的支援・PECSは車いす・補聴器・眼鏡等使用者への「合理的配慮」と同じであり, 生き抜くために必要な彼らの「権利」といえる。



事例6 まとめ

生活に視覚支援を活用する＝社会生活に活かす 4